

# 寓喩

## 知っておきたいキリスト教のことば (62)

かなり前、聖書の会の中で、こんな言葉を聞きました。「イエス様、もう少しわたしたちにわかるように話してくれたらよかったのに」。

聖書にはイザヤ書 5 章 1～7 節の預言やダニエル書 7 章の黙示文書など、表向きにはある物語を伝えながら、その奥には別の意味が隠れている箇所が見られます。そしてそのような表現の仕方を「寓喩」と呼びます。

イエス様のたとえ話も、寓喩として解釈された歴史があります。そのような解釈を、「寓喩的解釈」といいます。たとえばアウグスティヌスは「よきサマリア人のたとえ (ルカ 10 : 30～37)」について、「エルサレムからエリコに下っていったある人」を「アダム自身」、「エリコ」を「月、すなわち我々の死すべき性質」、また「着物をはぎ取る行為」を「その人の不死性をはぎ取ること」と解釈します。さらに「サマリア人」は「イエス・キリスト自身」、「オリーブ油を注ぐ」は「よき望みを与えて慰めること」、「宿屋」は「教会」、「宿屋の主人」は「使徒」というように解釈していきました。

現在はこのような解釈だけでは、たとえ話の本質をきちんと理解できないと考えられています。しかしイエス様のたとえ話は、福音書が書かれた頃すでに、様々な「寓喩的解釈」がなされたようです。

例を挙げるとイエス様のたとえの中に「種を蒔く人のたとえ (マルコ 4 : 1～9)」というものがありますが、このたとえを説明しているマルコ 4 : 13～20 はイエス様の言葉ではなく、福音書が書かれる前に原始キリスト教団によってなされた解釈であるという見方が一般的なものとなっています。

聖書の言葉をわかりやすく知りたいという思いは、今も昔も変わらないでしょう。



次回は「苦難」です。お楽しみに。